幼馴染み

柊オレンジ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幼馴染み

【Nコード】

N1230Q

【作者名】

柊オレンジ

【あらすじ】

幼馴染みだから隠してきた想い。複雑な離れ離れの気持ち。恋愛なんてしないと思っていた中田夏奈に襲い掛かるのは！？ 私、私ね、純が大好きだったよ・・・もう無理だって分かってる、だからこれで終わりにしよう 先輩、もし夏奈さんを泣かせることがあつたら俺、先輩のこと許しませんから・・・ 奪い合い、ライバル現る。恋愛に最後はない。

プロローグ

小さい頃、私は両親に連れられ、引越すことになった。

都会でもなく、田舎でもなく、ただただ平凡な一日を過ごせそうな、そんなところだった。

母がこの近くに知り合いがいることを知り、その家に向かった。

「あ！ここよ、ここ！篠原さんのお宅」

”篠原さん“その人が母の知り合いらしい。

篠原さんのお宅には、私と同年の男の子がいた。

だから今になっては幼馴染み。

母が篠原さんのお宅のチャイムを鳴らすと、奥から「はい」と声がした。

戸が開く。

「お久しぶり、今日ここへ引越していたんです。どうぞよろしく
お願いします」

母があいさつをしている間、私は篠原さんの後ろにいる男の子を見つけた。

「こちらこそ、この子が娘さん？」

「ええ、娘です。夏奈あいさつしなさい」

私は、母にそういわれ、自分の名前を言った。

「中田夏奈です」

自己紹介をすると篠原さんも息子に「あいさつしなさい」と言っている。

「篠原純也」

この小さい頃にこんな出会いがなければよかったのではないだろうか。

彼と幼馴染みということが私にとって不幸を呼んだのかもしれない。

プロローグ（後書き）

読んでいただきありがとうございます。
これかもよろしく願います。

#1 (前書き)

登場人物

中田 夏奈 なかた かな

篠原 純也 しのはら じゅんや

佐藤 雪 さとう ゆき

木村 翔 きむら しょう

桜満開の季節。春の風が木を揺らす。

高校二年生になる私は、始業式の始まる学校へと向かっていた。

「かなー、おはよー」

後ろから声を掛けてきたのは、私の親友の佐藤雪。

彼女とは、中学の時から友達になった。信頼しあえる友達だ。

「おーい、待てよ！夏奈、佐藤！」

また後ろから呼ばれた。それは篠原純也。私の幼馴染み。

小さい頃、両親に連れられこの街に来た。今となっては幸せだ。

「置いていっちゃうよー、純、木村君！」

私は純也のことを「純」と呼んでいた。小さい頃からそう呼んでいた。

純也の隣にいるのは、木村翔。彼は雪の彼氏であり、純也の友達。

私たちは、いつもこうして日々を送っていた。

学校に着くまで私たちの話は止まることは無かった。

学校に着くと、もう人がたくさん集まっていた。

「始業式だね・・・あ、クラス表があるよ！夏奈、見に行こう！」
私は、興味深く頷いた。

クラス表の貼られてある掲示板に駆け寄った。

「えーっと、私はD組！夏奈は？」

私は、A組から順に見ていった。

順に見ていった結果、D組に名前があった。

「D組だよ！やったー、一緒だね！」

私たちは、その場を騒ぎ立てた。後から純也と翔も駆け寄ってきた。

純也と翔も同じクラスだった。

クラスは全部でEまでしかない。だから一緒になる確率なんて少ない。
い。

だから私たちは奇跡だと思っていた。

教室に着き、中に入る。室内は、賑やかだった。

前の黒板に席が書いてある紙が貼られていた。

「一番左の・・・後ろか」

私は独りで呟く。一応良い席にいるのではないだろうか。

「うわあああ、最悪・・・一番前だよー」

雪はど真ん中の一番前。純也は、一番右の前から二番目。翔は、その後ろだ。

席はバラバラになってしまったがクラスが一緒なだけでも嬉しい。

私は席に座った。

席からはみんなが見渡せた。一番後ろという快感。

するとチャイムが鳴った。担任らしき人が教室に入ってきた。

「始業式が始まるから廊下に並んで」

そう指示があり、私たちはいつせいに動いた。

廊下に並ぶ時は、だいたい静かに並んでいた。

「これから始業式を始めます。礼」

司会の教頭先生が挨拶を言う。

そして刻々と時間は過ぎていき、一番苦痛の時間がやってきた。

それはもちろん校長先生の話。中学の時もやたらに長かった。

どうしてそんなに話すことがあるのだろうかといつも思う。

「えー、今日はね、始業式でね、明後日は入学式というね、大変だね・・・」

いつもこの校長は語尾に「ね」をつける。もう年だからなのかもしれない。

「・・・受験生のみなさん頑張つてね、それでは終わります」

「礼」

いつせいに礼をする。やっと終わる校長の話。溜息が聞こえる。

「これで始業式は閉式します。礼」

始業式が終わり、みんなの表情は朝より格段に暗くなっていた。

教室に戻ったD組は、ホームルームをした。

「今日はお疲れだった、今日は俺の自己紹介タイムだ！名前は渡部隆義・・・って知ってるよな！」

先生の話も長かった。自分のことになると長くなる。

生徒には叱り、自分が話しているときは満足気分。よくあるパターンだ。

今日はこれで終わりだがこれからが怖い。

一日の終わりのホームルーム。この時間がまた苦痛になる。

「じゃ、今日はこのくらいで！それでは、起立・・・礼！」

やっと終わった一日。昼前に帰れることが何よりの幸せ。

「夏奈、帰ろう！」

「うん」

そして私たちは、下校した。

#1 (後書き)

読んでいただきありがとうございました。

2

帰った後は、家でボーっとしていた。

何事も無かったようにポカんと・・・。

するとなんだか眠くなってきた。

「・・・昼寝しようかな」

独り言を呟き、自分のベッドで寝ることにした。

「かーなー！起きなさい！夕飯よー」

いつの間にか母も帰ってきていて、外は真っ暗だった。

「今いくー・・・」

力が入っていない声。寝起きはさすがに動きたくなかった。

だがそんなこと言ってられないので私は、リビングへ向かった。

「夏奈寝てたの？」

「うん・・・久しぶりの学校だったからね・・・」

そういい、テーブルに置かれてあるご飯を食べた。

食後は、風呂に入り、またすぐに寝てしまっていた。

次の日も学校で明後日は、入学式。体が慣れていないためだるくなる。

翌日。私はいつも通りの時間に起きた。

「・・・おはよ

「おはよう、朝御飯出来てるわよ」

母はそういい、テーブルに朝御飯を置いた。

「いただきます」

まだ眠気が取れていない。昨日あれだけ寝ていても疲れは取れないものだ・・・。

そう思いながらも順序よくご飯を食べていった。

「ごちそうさま

私は、ご飯を間食し、洗面所で顔を洗い、行く準備をした。

「それじゃ、行って来るね」

「いつてらしゃい

送り出された私は、家を出た。

学校に行くまで雪や純也達とは会わなかった。

三人はもうすでに学校についていた。

「夏奈！おはよう」

「おはよう」

雪が私のところへ駆け寄ってきた。純也は翔と話をしている。

「ねえ、夏奈！明日入学式終わった後、一年生の教室いかない？」

「え・・・そんな時間ないでしょ、すぐホームルームなんじゃないの？」

そう言い返すと雪は、勝ち誇ったかのように腕を組んだ。

「終わった後は、入部員を集めるための時間で部活見学なんだ！だから見に行かない？」

「別にいいけど・・・」

私は雪と一年生の教室に行くことを約束してしまった。

中学生のときもこんなことをしたような覚えがある。

目的は、イケメン探し。雪には彼氏がいるのにも関わらずだった。

雪と翔は、中学一年生から付き合い始めた。かなり長く付き合っている。

でも雪は彼氏に了承を得ているからいいと言っている。

そして長い授業も終わり、一日が終わろうとしていた。

#2 (後書き)

読んで下さりありがとうございます！
ぜひ感想を下さい。

翌日。とうとう入学式がきた。

四月二十五日。ついに後輩ができる時がきた。

さっそくはりきって学校に行った私は、校門に雪が立っているのを確認した。

「・・・あーかなー」

雪に見つかってしまった。

約束のことを言うために待ち伏せをしていたのだろう。

教室でも会えるのにわざわざ校門で待たなくてもいいんじゃないかと思った。

「今日、ゼーったい一年の教室行こうね」

「はいはい、分かってるって」

そういつて私は、雪の横をスツと通り抜けた。

「ちょっと！夏奈！もう・・・」

不貞腐れている雪の顔を見るのは、何回目だろうか？

教室につくともう先生が黒板に今日の予定を書いていた。

それをパツと見て私は、席に付いた。

あとから雪が教室に入ってきて、私の方をずっと見てきた。

視線は感じるが顔は向けない。向けたら確実に騒ぐことはわかっていたからだ。

するとチャイムが鳴った。生徒は席に着き、先生が教卓の前に立った。

「また式だが頑張ってくれ、今日は入学式だからな！それじゃ廊下に並んで」

そういつて二年D組は廊下に並んだ。

体育館には綺麗に椅子が並べられていた。

私たちはその椅子に座り、入学式が始まるのを待った。

「これから入学式を始めます、新入生出場」

教頭が司会をする。新入生が体育館に入ってきた。

新しい制服。ぴっちりとした髪型。一年生らしい子ばかりだ。

中には、不良っぽい子もいたがそこまで悪いようには見えなかった。

そして二時間かけての入学式が始まった。

終わったのは、十一時前。ずっと座っていたため、体中がこっぴつしまう。

そして教室に戻った後、私と雪は一年生の教室に向かった。

「ピッチピッチの一年生だね・・・よし！イケメンを探しに行こう！」

「何言ってるの？雪、彼氏いるでしょ！」

私の言葉を無視して、雪は一年の教室を覗いていった。

教室を覗くごとに一年生がこちらを警戒している。

それはそうだ。雪の目が怪しかった。

「ちょっと！ちょっとちょっと、夏奈！あそこ、あれイケメン男子だよ！」

それは教室、C組でのことだった。

私は雪に引つ張られ、教室を覗いた。

雪の指差しているほうをみたが女子の集っているところだとしか確認できなかった。

「どこ？あれって女子が集ってるだけ・・・」

「違ってる！その奥！囲われてるだけ！」

そついつと目を凝らす。よく見てみるとイケメンらしい男子が見えた。

雪はずっとカッコイイと思っているが私にとって男は顔ではないと思っっている。

そう思いながらももう一度彼を見た。

すると彼がことらに気付いた。

「やば！こつち見られたよ！雪、戸閉めて！」

「目が合ったらますますイケメンだ・・・」

私は壊れている雪を引つ張り、戸を閉めた。

一息をつく。緊張が張り詰めているようだった・・・。

するといきなり戸が開いた。

「わっ・・・って今さっきのイケメン君だ！」

雪が騒ぎ出す。私は啞然として見た。何を言われるのか心配だった。

「あ・・・中田夏奈さんですよ？前、図書館で会った・・・」

私と雪は、いきなりいった一言が意外すぎて啞然とした。

「え・・・えつと夏奈と知り合い？」

そう雪が聞くと彼は、中学のときのことを言ってきた。

「あ、中学のとき図書館で勉強してて、俺が悩んでたら夏奈さんが教えてくれたんです！それで俺、今

夏奈さんのファンで誰にでも優しいんだなって」

私は、中学時代の出来事を走馬灯のように思い出した。

「あのときの・・・藤本晃輝君だったっけ？」

「そうです、藤本晃輝です！」

そうして私と晃輝はあの時のことを話していた。

私の隣にいる雪は、不気味な笑みを浮かべていた。

何か企んでいそうな、そんな顔だった。

会話が終わり、そろそろ帰らなければならぬときがきた。

「もうそろそろ帰らないと・・・」

「そうなんですか・・・また勉強教えてください！」

そして長話は終わり、私と雪は学校を出た。

学校を出た後の雪は、妙なオーラを出していた。

何か起こりそうな予感はしていた。

学校から帰っていると純也が曲り角にいた。

「あ……純だ、それに下山さん？」

「ほんとだ……なんだろう？もしかして告白！ちょっと近く行って見よう！」

私は頷き、二人の会話が聞こえるところまで近づいた。

雪の予想は的中していた。下山から純也への告白だった。

#3 (後書き)

新登場人物

- ・藤本 晃輝 ふじもと こうき
- ・下山 麻梨 かやま まり

読んでくださりありがとうございます！
とつとつ問題がやってきました！！

「私、篠原君のこと好きなの！中学の時から好きで……」

生告白を始めてみる私は、胸が張り裂けそうなくらい緊張した。

本当だったら緊張するのは、私ではないのだが……。

「ごめん、俺女は作らねーから」

告白を断る純也。純也はなぜか彼女を作らない。

それは幼馴染みの私でも知らない。

「どうして？やっぱり篠原君は、中田さんのことが好きなの……？」

しっかり聞いてしまった。私の名前が出た。

純也が私を好きというのは、ありえないことだ。

幼馴染みは相手を知り尽くしているのだ。新しい出会いがなければ意味が無い。

「夏奈のことは別になんとも思っていない……」

「好きになっちゃダメ……、中田さんね一年生に好きな人がいるんだって、その子私達」

と同中でイケメンなの、今日二人きりで話してたよ、いい雰囲気だった、だから……

ね？」

どうしたのだろうか。下山の言っていることはすべて出鱈目。

私は、今にも泣きそうな気分。そして肩に優しさを込めてくれる、雪。

本当はここへ来なければよかったのではないか、そう考えてしまった。

「別に夏奈が男といたっていいんじゃない？そうゆう一年頃だろ？」

その言葉には、トゲがあるようだった。胸の奥に突き刺さる、そんなトゲ。

なんとも言えなかった。ただ聞いているだけでこんなにも押し潰されてしまう。

「夏奈……もう帰ろう？」

私は、頷いた。

雪のその言葉に救われた気がした。涙が溢れ、頭を撫でてくれる雪。

こんなとき頼りになるのは、親友だと改めて実感する。

家に帰ると母が夕飯を用意していた。

「あ、帰ったの？ちょっと手伝ってちょうだい」

私は母のことを無視し、自分の部屋へと入った。

どうしてかわからないが涙が出てきた。

「……………どうしてこんなに苦しいの？……………どうして……………」

自分の気持ちは曝け出すことは出来なかった。自分で自分の気持ちが分からなかった。

「かーなー、夕飯よー、下りてきなさい！」

私は、泣きながらベットの上で目を閉じた。

5

朝起きたのは、八時だった。

両親は、もう出かけていた。テーブルには、メモが置かれていた。

『今日は、純也君の両親と旅行へ行ってきました。ちゃんと純也君と仲良くしてよ!』

今日は、純也の両親と一緒に旅行に行っている。

だから純也と今日だけ一緒に暮らすことになった。

私は、純也が来る前に朝風呂に入った。

「はあ、どうして昨日見ちゃったんだろう・・・」

昨日のことを後悔する。

“ 夏奈のことは別になんとも思っていない・・・ ”

この言葉がどうしても頭から離れない。

私は、顔をシャワーに当てた。忘れなくて・・・、関係ないと思いたくて・・・。

風呂から出たら、もう九時になっていた。

リビングに行き、ソファに座っていると玄関のチャイムが鳴った。

「はい、純？」

「ああ」

あちらの暗い返事に私はビクビクした。

昨日、私たちが見ていたことがばれてしまったのではないだろうか、と。

鍵を開けるとやはり純也がいた。

私服にマフラーをしていた。髪の毛はいつも通りの髪型。

「お、おはよ・・・入って」

招き入れる私。それに頷く純也。

どんどん緊張と複雑さが増していく。

「なんでいきなり旅行なんかに行っちゃうんだろっな・・・」

「そうだね・・・」

純也の問いかけに私はただ一言しか返せなかった。

いつの間にか午後三時を過ぎていた。

「あ、もう三時じゃん」

「ほんとだ・・・」

少しの会話に沈黙。この静かな空気が異様に長かった。

「なあ、夏奈」

私は、肩を上げた。ビックリした私を見て純也は、顔を変えた。

「夏奈、今日俺が喋るたんびにビクビクしてね？」

その言葉にすでにビクビクしている。

「そ、そんなことないよ・・・」

「なんか隠してるだろ？見ればわかる・・・幼馴染みなんだから」

私は、心臓の音が聞こえそうなほど騒いでいた。

#5 (後書き)

変なところで終わっちゃったかもしれません。
すみません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1230q/>

幼馴染み

2011年1月22日14時27分発行